

はつきりとした形で、私の記憶に残っていた最初のこと。いえ、恐ろしく真っ暗闇の中を流れていたことである。生まれた時に感じたものと同じ水の匂いは、あつたけれども、風景の青い空も無ければ、川面を渡る風の音ももちろんなくて、つまりはほどに單調な流れに私は身を任せていた。ところが数時間が経った頃、いきなり眩しさを感じたのである。

梢の間から太陽が見え隠れしており、灌木の青い若葉が水面近くに垂れ下がっていた。まもなく、私は偶然に出会った数匹の仲間とともに、細い木路を走っている匂勾配を感じ、流れのゆるやかな湖のよのうどけで泳いでいた時に、何かでさと捕られたようであった。何せ、この水は人間でいう空気と同じであつて、いきなり水中深く引きずり込まれた人間のことを想像すれば、私の驚きがいかほどのものか分かるだろう。

おり難い」とすぐに水の中に戻ることが出来たが、水がリズムを取つて横に揺れたので、吐き気のするのを我慢した。そのうちに我達六匹は、別の入れ物に静かに移されたようであった。そこは四角い世界で、平面には微かに波音が付着していた。

私は、初めての仲間と一緒に住んでいたところが、私はここにいたくねくねとまるで蛇のように泳ぐ魚は驚いてしまったのである。しかも数えてみると、五匹もいたバクバク口を開いたまま驚かして、一番太った魚に「君たちはどうしてここにいるのか」と尋ねてみるとおむね次のような絆紳らしい。

さう家人について触れるにしたがって、出来たが、水がリズムを取つて横に揺れたので、吐き気のするのを我慢した。そのうちに我達六匹は、別の入れ物に静かに移されたようであった。そこは四角い世界で、平面には微かに波音が付着していた。

私は、初めての仲間と一緒に住んでいたところが、私はここにいたくねくねとまるで蛇のように泳ぐ魚は驚いてしまったのである。しかも数えてみると、五匹もいたバクバク口を開いたまま驚かして、一番太った魚に「君たちはどうしてここにいるのか」と尋ねてみるとおむね次のような絆紳らしい。

さう家人について触れるにしたがって、出来たが、水がリズムを取つて横に揺れたので、吐き気のするのを我慢した。そのうちに我達六匹は、別の入れ物に静かに移されたようであった。そこは四角い世界で、平面には微かに波音が付着していた。

私は、初めての仲間と一緒に住んでいたところが、私はここにいたくねくねとまるで蛇のように泳ぐ魚は驚いてしまったのである。しかも数えてみると、五匹もいたバクバク口を開いたまま驚かして、一番太った魚に「君たちはどうしてここにいるのか」と尋ねてみるとおむね次

## 短編小説

# 鮎の眼

## 今井 隆



いまい・たかし 昭和30年、岐阜県益田郡（現・揖斐郡）萩原町に生まれる。農林水産省に勤務するかたわら、30歳くらいから小説、脚本などを書き始める。文部省人選「委嘱」作家。短編で「岐阜市文藝祭賞」受賞。平成12年に本編新装版「鮎の眼」を発行して育成。

「今日はトマトの出来はどうかな……。うん、糖度も高いし、酸味のバランスもいい。」の下に、石部健吉の作り方でいいんだな」と

「おーい、加寿子、飯はまだか？」

&lt;p